

資料4-6

## 研究報告の報告状況

(平成22年1月1日から平成22年3月31日までの報告受付分)

研究報告の報告状況  
(平成22年1月1日～平成22年3月31日)

資料4-6

	一般的名称	報告の概要
1	リスペリドン	リスペリドンの血漿中濃度とQT間隔との関連を調べるため、リスペリドンを服用している入院患者12名のECGを測定した結果、リスペリドンは夜間のみ濃度依存的にQT間隔を延長させた。
2	塩酸プロプラノロール アテノロール	妊娠初期における降圧薬の使用と出生児の先天性奇形との関連性について、妊娠初期に降圧薬を使用していた女性1418例を対象にレトロスペクティブなコホート研究を行った。その結果、降圧薬(ACE阻害薬、β-遮断薬、カルシウム拮抗薬)の使用により心血管奇形のリスクの増加が認められた。また、β遮断薬単独使用では奇形発現例数は798例中25例であった。
3	リンゴ酸スニチニブ	ヘミ接合体rasH2トランスジェニックマウスを用いたリンゴ酸スニチニブの6ヶ月がん原性試験において、25 mg/kg/day以上投与群のメスにおいて、血管肉腫の発生頻度が増加し、75もしくは50 mg/kg/dayを投与した群で胃十二指腸の腫瘍が認められた。また、胃粘膜肥厚が本試験の25 mg/kg/day投与群で確認された。
4	塩酸リトドリン	塩酸リトドリン(R剤)及び硫酸マグネシウム(M剤)による新生児の骨代謝への影響について、妊娠27-37週に分娩した91例を対象に母体血及び胎児臍帯静脈のCa値を比較した。その結果、R剤投与群では非投与群と比べて母体血Ca値は低下した。またR+M剤併用群ではR剤の総投与量・投与期間と母体血Ca値に有意な負の相関が認められた。
5	トシル酸ソラフェニブ	肝動脈塞栓化学療法を受けた414例を無作為化し、トシル酸ソラフェニブ群またはプラセボを投与した結果、トシル酸ソラフェニブ群では有害事象による減量および中断が高頻度に起こり、減量の主な理由は手足の皮膚反応であった。
6	リツキシマブ(遺伝子組換え)	びまん性大細胞型B細胞性リンパ腫47例を対象に、自家末梢血幹細胞移植の前処置としてリツキシマブ併用もしくは非併用CHOP療法における予後についてレトロスペクティブに調査した結果、併用群において遅発性好中球減少症の発現率が有意に高かった。
7	メトトレキサート	初回治療を終了した初発の小児骨肉腫患者52例を対象に、術後化学療法として大量メトトレキサートを含む化学療法を行った結果、二次発癌が1例認められた。
8	メトトレキサート	骨肉腫10例に対して、術前化学療法として大量メトトレキサートを行った結果、二次発癌が2例、バーキットリンパ腫による死亡が1例認められた。
9	プロチゾラム	妊娠中の使用薬剤と出生児の異常に関して、2903人を対象に後ろ向き調査を行った結果、109人に催眠鎮静剤が投与されていた。うち、80症例がプロチゾラム、26症例がジアゼパムを投与されており、出生児に異常の認められた17例のうち、16例(異常発生頻度20%)がプロチゾラムを投与されていた。
10	塩酸プピバカイン	ウシの手根関節モデルを使用し、関節軟骨の軟骨細胞生存度に対する局所麻酔薬(プピバカイン、リドカイン、ロピバカイン)の作用を評価した結果、用量及び時間依存的に軟骨細胞生存度は低下した。また、軟骨細胞生存度は、プピバカインのみに比べてプピバカイン及びエピネフリンの存在下で軟骨細胞生存度は低下した。
11	リスペリドン	トルサード ド ポワンのリスクによって分類された薬剤と突然死の関連についてケースコントロール研究を行った結果、非心臓系薬剤のうち定型抗精神病薬、非定型抗精神病薬及び選択的セロトニン再取り込み阻害剤(SSRI)において有意にリスクが上昇した。
12	ヨード化ケシ油脂肪酸エチルエステル	本剤+シスプラチン製剤(CDDP)併用動注療法が施行された肝細胞癌17症例の治療奏効率、累積生存率についてレトロスペクティブに検討したところ、骨髄抑制2例、全身倦怠感及び食欲低下10例が認められた。

13	ヨード化ケシ油脂肪酸エチルエステル	選択的肝動脈塞栓術が適応外であった肝細胞癌54症例に対して、本剤+シスプラチン製剤(CDDP)併用動注療法を行ったところ、54症例中6例に掻痒を伴う皮疹や咳などの副作用の発現が認められた。
14	ヨード化ケシ油脂肪酸エチルエステル	進行性肝細胞癌60症例に対して、本剤+シスプラチン製剤(CDDP)併用動注療法を行ったところ、動注後肝不全が認められた。
15	塩酸メチルフェニデート	注意欠陥多動性障害(ADHD)の薬物治療と死亡率との関連を調べるため、メチルフェニデート、dexamfetamine、アトモキセチンを処方された2-21歳のADHD患者18637例でコホート研究を行った結果、死亡した7例中死因が判明した6例において突然死の患者は見られなかった。また自殺による標準化死亡比は11-14歳では161.91、15-21歳では1.84であった。
16	リン酸コデイン(他1報) リン酸コデイン(1%以下)	コデインを投与された母親の授乳によるオピオイド中毒のリスクについて physiologically-based pharmacokineticモデルを用いてシミュレーションした結果、母親のコデイン及びモルヒネのクリアランスと新生児のモルヒネクリアランスは新生児のモルヒネ蓄積の最も大きい要因であった。母親がCYP2D6のextensive metabolizerである場合にオピオイド中毒のリスクが高いことが示された。
17	レボホリナートカルシウム	肝動脈注入療法を受けた切除不能な結腸直腸癌肝転移患者153例の全生存期間を調査した試験において、死亡が3例発現した。
18	リスペリドン	抗精神病薬を処方されたてんかん患者176例で発作増悪について調べた結果、7例において発作増悪が見られたがてんかん分類や発作型に傾向は認められなかった。
19	リスペリドン(他1報)	グルタミン酸トランスポーターの遺伝子多型と非定型抗精神病薬誘引の強迫神経症症状との関連を調べるため、ロジスティック回帰モデルを用いて評価した結果、SLC1A1における配列変異は非定型抗精神病薬誘引の強迫神経症症状との関連が認められた。
20	A型インフルエンザHAワクチン(H1N1)	EUで中央認可された3種のA型インフルエンザHAワクチンについて、2009年12月18日時点で8745例の副反応が報告され、ギランバレー症候群13例、ミラーフィッシュャー症候群1例の報告やてんかん患者におけるてんかん発作による死亡が3例認められた。
21	メシル酸プロモクリプチン	6ヶ月以上プロモクリプチンを服用している患者において、経胸壁心エコーを用いて心臓弁閉鎖不全の調査を行った結果、用量依存的に閉鎖不全のリスクが上昇することが示唆された。
22	クラリスロマイシン	15年間(1993年4月1日~2008年3月31日)の期間で行われたカナダの一般住民を母集団としたコホート内症例対照研究より、マクロライド系薬剤とジゴキシン毒性との関連について調査したところ、抗生物質併用を行わない群と比較して、クラリスロマイシン、エリスロマイシンあるいはアジスロマイシンを併用することで、ジゴキシン中毒のリスクが増加した。
23	ワルファリンカリウム	50歳以上の米国人を対象に、ワルファリン服用患者における骨粗鬆症性骨折のリスクについて、後ろ向き症例対照研究を行った結果、1年以上ワルファリンを服用している患者は、非服用者と比較して骨折リスクが上昇することが示唆された。(OR:1.19 95%CI 1.02-1.40)
24	ブデソニド・フマル酸ホルモテロール水和物 ブデソニド	慢性閉塞性呼吸器疾患に対する長時間作用型β2アゴニスト(LABA)と吸入コルチコステロイド(ICS)の併用及びLABA単独療法についてのシステマティックレビューを行った結果、LABA/ICS併用療法とLABA単独療法は治療効果に差はなく、LABA/ICS併用療法においては、肺炎等の感染症のリスクの増加が認められた。
25	リン酸オセルタミビル	オセルタミビルの行動に及ぼす影響について、本剤を投与したマウスの明暗選択テストの明箱滞在時間やオープンフィールドテストの移動活動量を検討した結果、アデノシンA1/A2受容体拮抗薬カフェイン併用投与において明箱滞在時間及び移動活動量の増加が認められ、この変化はドパミン受容体拮抗薬によって抑制された。

26	シクロスポリン	移植を実施した283例の患者を対象として造血幹細胞移植患者の出血性膀胱炎の危険因子を検討するため、統計解析ソフトウェアSPSSを用い、レトロスペクティブ研究を行ったところ出血性膀胱炎発現患者が120例認められ、graft-versus-host disease(GVHD)治療および予防としてのプレドニゾロンとシクロスポリンの使用において関連が認められた。
27	ポリコナゾール	肺移植後にポリコナゾールを投与された572例について、後ろ向きに調査した結果、15例で扁平上皮癌が発現した。
28	リン酸オセルタミビル	健康成人におけるノイラミニダーゼ阻害剤のインフルエンザの予防および治療に対するシステマティックレビューおよびメタアナリシスを評価したところ、ノイラミニダーゼ阻害剤はインフルエンザ様疾患の予防や無症候性のインフルエンザの予防に対して効果を示さなかった。また、オセルタミビルは悪心の発現リスクを増加させた。
29	メトトレキサート	シスプラチンベースの化学療法が適応されない進行尿路上皮癌患者に対するゲムシタピン/カルボプラチン(GC)レジメンとメトトレキサート/カルボプラチン/ビンブラスチン(M-CAVI)レジメンを評価するランダム化II/III相試験において、GC群で2例(2.3%)、M-CAVI群で4例(4.6%)の死亡が認められた。
30	ベバシズマブ(遺伝子組換え)	近視性脈絡膜新生血管(mCNV)に対してベバシズマブ(IVB)硝子体注入を行った20例を対象に、治療前後の視力、網膜中心厚、新生血管膜の大きさ等について検討した試験において、IVBはmCNVに有効であるものの、視野感度低下が起こる可能性が示唆された。
31	胎盤性性腺刺激ホルモン	54,362人の女性を対象としたデンマークの大規模コホート研究にて不妊治療薬による子宮癌のリスクを検討した結果、ゴナドトロピン類、クロミフェン、hCG投与群では子宮癌の発現率が増加し、用量の増加あるいは追跡期間の延長によりそのリスクが更に上昇した。
32	プロポフォール	斜視の手術を行う小児280例を対象に、麻酔薬と眼球心臓反射との関連について無作為に8グループ(導入麻酔薬としてミダゾラム併用、ケタミン併用の各4グループ)に割付け検討した結果、プロポフォールまたはレミフェンタニルによる麻酔は、セボフルラン及びデスフルランと比較して眼球心臓反射の発現率が高かった。
33	ベザフィブラート	ベザフィブラートの服用と血漿ホモシステインを調節するベタインの排泄との関連性について調査を行った。結果、ベザフィブラート服用群は非服用群よりベタイン排泄が高く、それにより血漿中ホモシステインを上昇させることが示唆された。
34	胎盤性性腺刺激ホルモン	1歳の男児の停留精巣に対してゴナドトロピンにて治療後、右側不全麻痺及び落ち着きのなさを突然発症し、脳MRIにて左中大脳動脈部に急性の梗塞、磁気共鳴血管造影にて左中大脳動脈の閉塞が認められた。
35	胎盤性性腺刺激ホルモン	停留精巣男児における左室(LV)肥満指数に対するhCGの影響をコホート研究にて調査した結果、hCG療法を受けた停留精巣男児では、健常対照群に比較して治療終了時のLV肥満指数が有意に高かった。hCG群において、血清テストステロン値とLV肥満指数に相関性が見られた。
36	塩酸イミプラミン	心血管リスクのない患者において抗うつ薬と心血管転帰の関連について、退院記録や処方データベース及び人口動態統計を解析した結果、死亡全体のリスクは抗うつ薬により上昇した。また選択的セロトニン再取り込み阻害剤(SSRI)と三環形抗うつ薬の使用により、降圧薬の使用が増加し、SSRIの使用により糖尿病治療薬の使用が増加した。
37	カルバマゼピン(他1報) スルファメトキサゾール含有一般用医薬品 スルファメトキサゾール・トリメプリーム(他1報) プリミドン フェニトイン フェニトイン・フェノバルビタール バルプロ酸ナトリウム	Clalitヘルスサービスに登録された女性84823例を対象に葉酸拮抗剤暴露と先天異常のリスクに関する大規模コホート研究を行った結果、571例の胎児および乳児が妊娠3ヶ月までの時期に葉酸拮抗剤暴露を受け、神経管欠損・心臓血管欠損等の先天性異常のリスクとの関連性が認められた。

38	クラリスロマイシン(他5報) ランソプラゾール・アモキシシリン・クラリスロマイシン	ジゴキシンとクラリスロマイシンの相互作用によりジゴキシン中毒が発症するリスクを評価するため、National Health Insurance Research Databaseから新規でジゴキシン治療を受けた心疾患患者を対象にレトロスペクティブかつ集団ベースのコホート内症例対照研究を行ったところ、入院前のクラリスロマイシン投与によりジゴキシン中毒の発症率は有意に増加し、7日前からの処方では4.36倍、14日前からの処方では5.07倍、30日前からの処方では2.98倍となった。
39	リツキシマブ(遺伝子組換え)	高齢者のびまん性大細胞性B細胞リンパ腫69例に対して、R-CHOP群とCHOP群に分けて、真菌感染リスクについてレトロスペクティブに調査した結果、R-CHOPと80歳以上の年齢が有意なリスク因子であると算出された。
40	ゲムツズマブオゾガマイシン(遺伝子組換え)	再発・難治性骨髄性白血病に対するサルベージ療法として、FLAG-IMレジメン群48例(フルダラビン、シタラビン、イダルビシン、ゲムツズマブ・オゾガマイシン)、FLAG-IRレジメン群23例(フルダラビン、シタラビン、イダルビシン)に分けて加療した結果、FLAG-IM群で3例が死亡した。
41	ラベプラゾールナトリウム	40歳以上の患者を対象として、酸分泌抑制剤を現在使用している患者と過去に使用した患者との骨折リスクの違いについて検討したところ、酸分泌抑制剤の過去使用患者に比べて現在使用患者で骨折リスクが上昇し、また、ビスホスホネート製剤を現在使用している患者において、酸分泌抑制剤非併用群と比べて併用群で骨折リスクの上昇が見られた。
42	クラリスロマイシン	ピタバスタチンの薬物動態におけるクラリスロマイシンの影響を調べるため、OATP1B1*1a/*1b遺伝子型をもつ12人の健常な韓国人に対し、ウォッシュアウト期間を1週間としてオープンラベル試験を行ったところ、クラリスロマイシン併用によりピタバスタチンのCmaxおよびAUCが有意に増加した。
43	バルプロ酸ナトリウム	てんかん女性593例の児で前向き研究が行われ内369例の児で6才時に認知機能の評価が行われた。コントロール群と比べ、子宮内でバルプロ酸Naに曝露した児はフルスケールIQ、記憶力、呼称能力、聴覚的注意課題、カルバマゼピンに曝露した児は視覚的注意課題で有意な差が認められた。
44	ラベプラゾールナトリウム	C.difficile関連疾患(CDAD)の小児患者68例の薬物暴露歴をC.difficile陰性のコントロール群と比較したところ、プロトンポンプ阻害薬(PPI)の使用はCDAD群で多かった。
45	アスピリン・ダイアルミネート アスピリン	30歳以上の心筋梗塞の患者40812例を対象に、抗血栓治療薬(アスピリン、クロピドグレル、ビタミンK拮抗薬)の使用と出血、心筋梗塞の再発、死亡との関連性についてレトロスペクティブに解析した結果、抗血栓治療薬の数に比例し、出血による入院のリスクが高かった。
46	アスピリン・ダイアルミネート	6ヶ月以上の低用量アスピリン服用者と非服用者において、大腸粘膜障害の発症率を比較した結果、服用者のほうが有意に発症率が高いことが示唆され、粘膜障害の種類別では、潰瘍が多かった。
47	イオヘキソール	無作為化対照試験を用いたメタアナリシスにおいて、動脈内投与を受けた腎不全患者での造影剤腎症のリスクが、イオジキサノールと比較しイオヘキソールで高かった。
48	ヘパリンナトリウム	皮下ヘパリン投与を継続する患者群において、ヘパリン誘因皮膚病変の有無について前向き調査を行った。結果、7.5%が皮膚病変を発症し、そのリスク因子は肥満度指数25以上、投与期間が9日以上、女性であることが示唆された。
49	プリミドン クロバザム クロナゼパム フェニトイン フェニトイン・フェノバルビタール バルプロ酸ナトリウム	胎児へ有害とされる薬剤による妊娠中絶、新生児の奇形の発現を検討した結果、妊娠中絶率は非使用群で36%、使用群で47%、奇形は非使用群で7%、使用群で8%であった。またレチノイド、抗てんかん薬、ベンゾジアゼピン、スタチン、アンジオテンシン変換酵素阻害薬、アンジオテンシン受容体遮断薬、フルコナゾール及びリチウムを妊娠第一期に使用した5465例の妊婦のうち、46%に妊娠中絶、7%に流産が認められ、2755例の出生児のうち9%に奇形が認められた。

50	クラナゼパム ジアゼパム	妊娠中の向精神薬の使用と早産や有害な分娩結果との関連についてコホート研究によって検討した結果、ベンゾジアゼピン系化合物により早産及び出生時低体重児、低アプガースコア、NICUでの管理及び呼吸急症候群のリスクは上昇した。選択的セロトニン再取り込み阻害薬は妊娠第一期後に治療を開始した女性のみ早産リスクが上昇した。
51	高カロリー輸液用総合ビタミン剤(6) ビタミンB・葉酸含有一般用医薬品	6837例の虚血性心疾患患者を対象に行った葉酸とビタミンB群の使用に関する2つの無作為化比較対照試験を解析した結果、葉酸とシアノコバラミン(VB12)の併用群において、癌の発生と死亡のリスクが有意に高いことが示唆された。
52	ランソプラゾール ラベプラゾールナトリウム	市中肺炎による入院歴がある65歳以上の患者において市中肺炎の再発に及ぼす酸分泌抑制剤の影響を検討したところ、酸分泌抑制剤未使用群に比べて現在使用群では市中肺炎の再発リスクが上昇し、中でも前回の入院後に酸分泌抑制剤の使用を開始した患者において再発リスクの上昇が大きかった。
53	メコバラミン含有一般用医薬品	妊娠中の葉酸摂取と小児喘息の発現リスクとの関連を前向きコホート研究で検討した結果、妊娠後期にサプリメントからの摂取により3.5歳時点の小児喘息及び持続性喘息(3.5歳-5.5歳)の発現リスクは有意に上昇した。
54	ラベプラゾールナトリウム	急性冠動脈症候群または経皮的冠動脈インターベンションで入院した患者においてクロピドグレルとプロトンポンプ阻害剤(PPI)との併用による心血管系有害事象発生に対する影響について検討した結果、非併用群と比べて併用群は心筋梗塞による入院率、死亡率のわずかな上昇を示した。
55	ブデソニド・フマル酸ホルモテロール ブデソニド プロピオン酸フルチカゾン	慢性閉塞性肺疾患に対する吸入ステロイド剤(フルチカゾン、ベクロメタゾン、ブテジニド)の長期使用と肺炎のリスクについてメタ解析を行った結果、24週を超える吸入ステロイド剤の使用において、重篤な肺炎の発症リスクの有意な増加が認められた。
56	ブデソニド・フマル酸ホルモテロール ブデソニド プロピオン酸フルチカゾン(他1報)	吸入副腎皮質ステロイド(ICS)の使用が肺炎による入院リスクを増加させるか調べるため、1997年から2005年のヘルスケアデータベースにおける北部デンマークの住民を対象とした症例対照研究を行ったところ、342,390例の対照集団および34,239例の肺炎に関連した入院集団においてICS使用群はICS非使用群に比べ、肺炎に関連した入院の相対リスクが増加した。
57	エストラジオール(他2報)	エストラジオール・プロゲステロン(E・P)療法を受けた50歳以上のフィンランド人女性における子宮内膜癌のリスクを評価した結果、6ヵ月間以上のE・P療法の使用は1型子宮内膜癌リスクを上昇させた。また、5年以上の周期的なE・P療法の実施における1型子宮内膜癌リスクについて、毎月プロゲステロン投与した場合で69%、3ヵ月毎プロゲステロン投与の場合で27%の上昇を示した。
58	塩酸ドキシソルビシン	閉経前乳癌106例を対象に化学療法(ドキシソルビシン/シクロホスファミド)の骨代謝への影響を調査した結果、化学療法施行群において骨量減少および骨代謝増加が認められた。
59	テオフィリン(他1報)	薬剤治療を受けている45歳以上の慢性閉塞性肺疾患(COPD)患者183,573名を対象としたテオフィリン使用に関するレトロスペクティブコホート研究において、テオフィリン使用群における死亡、COPD悪化及び入院リスクが高かった。
60	非ピリン系感冒剤(3)	剖検した6178例を対象に薬物相互作用のある薬剤併用状況と出血リスクについて調査した結果、ワルファリン単独投与群に比してアセトアミノフェン併用群で出血リスクの有意な増加が認められた。
61	リスペリドン(他2報) ハロペリドール	トルサード ドポワンのリスクによって分類された薬剤と突然死の関連についてケースコントロール研究を行った結果、非心臓系薬剤のうち定型抗精神病薬、非定型抗精神病薬及び選択的セロトニン再取り込み阻害剤(SSRI)において有意にリスクが上昇した。
62	塩酸アマンタジン	薬物摂取と突然死リスクの関連をケースコントロールスタディにおいて検証した結果、アマンタジンの突然死のオッズ比は6.0(95%CI:0.54-66.17)であった。

63	フマル酸ビソプロロール 酒石酸メブプロロール	血管手術前にβ遮断薬を投与された患者において術後の譫妄発症について調査した結果、譫妄の発症率は22%であった。予測因子として、年齢、脳血管障害の既往、うつ病であることが示唆された。
64	臭化イプラトロピウム	慢性閉塞性肺疾患(COPD)を対象に臭化イプラトロピウムの投与と心血管系イベント(心不全、不整脈、急性冠症候群)リスクとの関連性について調査したコホート研究において、過去6ヶ月以内に臭化イプラトロピウムを投与を受けた患者群において心血管系イベントリスクの上昇が認められた。
65	アルテプララーゼ(遺伝子組換え)(他1報)	イギリスで眼内レンズ移植を受けた5例において、アルテプララーゼ投与により繊維索性ブドウ膜炎を治療した後、5ヶ月～7年後に眼内レンズ混濁が発現した。
66	グリクラジド	経口糖尿病薬の使用と、心筋梗塞、うっ血性心不全、全死亡率との関連性を評価するため、イギリスの糖尿病患者91521例を対象にレトロスペクティブコホート研究を実施した結果、スルホニル尿素薬の投与は、メホルミンの投与に比べ、心筋梗塞、及びうっ血性心不全の発現率、全死亡率が有意に高かった。
67	メタヨードベンジルグアニジン(131I)	悪性褐色細胞腫、傍神経節腫の治療における高用量メタヨードベンジルグアニジンの安全性について調査した結果、50例中グレード3～4の血液毒性が起こった例は4例、非血液毒性(肺炎等)が起こった症例は31例であった。
68	バルプロ酸ナトリウム	妊娠時に抗てんかん薬暴露による子どもの認知機能や行動機能への長期影響について、胎児期にバルプロ酸、ラモトリギンまたは両剤の暴露を受けた小児23例及びその両親を対象に知能検査を行った。その結果、併用により6歳児におけるIQは低下した。親のIQ、投与量、全身性強直性間代性発作、経済レベルによる有意な影響は認められなかった。
69	バルプロ酸ナトリウム	胎児期に抗てんかん薬(カルバマゼピン、ラモトリギン、フェニトイン、バルプロ酸)暴露を受けた3歳の小児234例を対象に、認知機能に与える影響について前向き多施設共同観察研究により検討した。その結果、小児の認知機能はバルプロ酸及びカルバマゼピンの投与量と負の相関を示した。ラモトリギン及びフェニトインについて用量依存性は認められなかった。
70	オキサリプラチン	大腸癌肝転移の術前化学療法を行った47例を、5-FU単独20例、イリノテカンもしくはオキサリプラチン併用群27例に分けて肝の類洞拡張の発生頻度について調べた結果、併用群において類洞拡張の発生頻度が有意に高かった。
71	ニコチン酸トコフェロール 酢酸トコフェロール	ビタミンEの摂取群と非摂取群において、メタアナリシスの手法を用いて生存年数の比較を行った。結果、摂取群は非摂取群より生活の質で調整された生存年数が0.3年短いことが示唆された。
72	ラベプラゾールナトリウム ランソプラゾール	肺炎と診断された患者7297例において胃酸分泌抑制剤の使用に関連する肺炎に関して、使用していない群と比べた相対危険度を検討したところ、プロトンポンプ阻害剤(PPI)による市中肺炎の増加がみられた。
73	カベルゴリン	データベースを使用した疫学研究において、パーキンソン病患者でのカベルゴリンの使用は、レボドパと比較し、他のドパミンアゴニストの過去の使用とは関係なく心臓弁膜症のリスクを増加させた。また、カベルゴリン使用に伴う心臓弁膜症のリスクは3mg以上の用量で最も高かった。
74	ナプロキセン	カリフォルニアのMediCalデータを利用したネステッドケースコントロール研究により、ナプロキセンの使用における胃・十二指腸潰瘍のリスクについて調べたところ、ナプロキセン使用群は長期間のNSAIDs又は選択的COX-2阻害薬使用群に比べ有意に高かった。また、ナプロキセンによる胃・十二指腸潰瘍のリスクは用量依存的に増加する傾向があった。
75	黄熱ワクチン	黄熱ワクチン接種4日後のドナーから献血された血液を輸血された4例中3例において黄熱ワクチンIgMが検出された。

76	エストラジオール(他1報)	閉経後ホルモン療法(HRT)と乳癌発症リスクについて、ケースコントロール研究を行った結果、HRTとしてレボノルゲストレル放出子宮内システムを単独で使用した群およびエストラジオールを併用したレボノルゲストレル放出子宮内システムを使用した群において、コントロール群よりも乳癌発症リスクが増加した。
77	ランソプラゾール	オランダのデータベースを用い、18歳以上の骨折患者6,763例を対象として症例対照研究を行った結果、プロトンポンプ阻害薬(PPI)を現在使用している患者において股関節骨折リスクの上昇が見られた。一方で、PPI使用期間が長くなるに従いリスクは減少した。
78	鎮咳配合剤(1)	コデインを投与された母親の授乳によるオピオイド中毒のリスクについて physiologically-based pharmacokineticモデルを用いてシミュレーションした結果、母親のコデイン及びモルヒネのクリアランスと新生児のモルヒネクリアランスは新生児のモルヒネ蓄積の最も大きい要因であった。母親がCYP2D6のextensive metabolizerである場合にオピオイド中毒のリスクが高いことが示された。
79	プラバスタチンナトリウム	774例の高齢者を対象に筋肉量、筋機能および転倒・転落リスクについてプロスペクティブコホート試験を行ったところ、スタチンの使用により筋機能低下と転倒・転落リスクの上昇が示唆された。
80	カルバマゼピン	抗てんかん薬による重症薬疹(スティーブンス・ジョンソン症候群など)の発現リスクについて、日本人13例を対象にHLA class1の遺伝子多型について検討した。その結果、日本人陰性対象と比較して、アレル出現率に有意差があったのは、B*5901であった。
81	塩酸パロキセチン水和物 クエン酸タモキシフェン	タモキシフェン投与中にパロキセチン、セルトラリン、シタロプラム、ベンラファキシン、フルオキセチンもしくはフルボキサミンのうち1種類のSSRIを投与された乳癌女性2430例について後ろ向きコホート研究を行った結果、パロキセチン群でタモキシフェンとの併用期間が長いほど乳癌による死亡のリスクが上昇した。
82	ワルファリンカリウム(他2報)	フィンランドの検死毒性データベースにおいて、ワルファリンと相互作用を有する薬剤について調査した結果、アセトアミノフェンとワルファリン併用により致死性の出血の発現リスクが上昇することが示唆された。
83	クエン酸シルденаフィル	健常成人男性6例を対象としてクロスオーバー無作為比較試験を行ったところ、ザボンジュース投与群のバイオアベイラビリティは、コントロール群の約60%であった。
84	硫酸亜鉛	皮膚ウイルス疣贅の治療に対する硫酸亜鉛の安全性を検討するため、二重盲検ランダム比較試験において、硫酸亜鉛経口投与群25例とプラセボ群25例を比較したところ、プラセボ群3例、硫酸亜鉛投与群10例で消化不良、プラセボ群0例、硫酸亜鉛投与群8例で嘔吐が認められた。
85	塩酸ベニジピン 塩酸ベラパミル ニフェジピン	降圧治療を受けている患者1305例(利尿剤+β遮断薬:629例、利尿剤+Ca拮抗薬:273例、利尿剤+ACEI又はARB:403例)を対象に症例対照研究を行ったところ、利尿剤+Ca拮抗薬治療患者群で心筋梗塞のリスクが上昇した。
86	アセトアミノフェン(他3報) 非ピリン系感冒剤(4)	フィンランドの検死毒性データベースにおいて、ワルファリンと相互作用を有する薬剤について調査した結果、アセトアミノフェンとワルファリン併用による致死性の出血の発現リスクの上昇が示唆された。
87	酢酸リュープロレリン	前立腺癌患者37443例について観察研究を行った結果、GnRHアゴニスト(GnRHa)単独、経口抗アンドロゲン薬(AA)単独、GnRHaとAA併用や除睾術による低アンドロゲン療法(ADT)のうち、GnRHaによるADTが糖尿病および心血管疾患の発症リスク増加と関連することが示唆された。
88	プロポフォール	治療抵抗性てんかん重積患者におけるプロポフォール注入症候群(PRIS)を調べるため、ICUに運ばれた治療抵抗性てんかん重積患者41例で後ろ向き研究を行った結果、プロポフォールを投与された31例中14例でPRISの症状が1つ以上認められ、内3例で心肺停止が生じた。



89	硫酸アバカビル	高活性抗レトロウイルス療法を(HAART)受けたデンマークのHIV感染症患者2952例を対象とした前向きコホート研究より、HAART開始後の心筋梗塞(MI)による入院率をアバカビル使用患者および未使用患者について算出したところ、アバカビル未使用患者において2.4/1000人・年であり、アバカビル使用患者において5.7/1000人・年であった。
90	塩酸オキシコドン水和物	セイヨウトグリソウのオキシコドンのCYP3A代謝に与える影響を評価するため、12例でプラセボ対照クロスオーバー試験を行った。セイヨウトグリソウ又はプラセボを投与しオキシコドンの血中濃度及び鎮痛作用を測定した結果、セイヨウトグリソウ群ではオキシコドンの血中濃度は低下し、鎮痛効果は有意に減少した。
91	ポリエチレングリコール処理人免疫グロブリン	重症の同種免疫性溶血性黄疸の新生児492例を対象とした高用量免疫グロブリン静注(IVIG)投与の新生児壊死性腸炎(NEC)リスクに関するレトロスペクティブ研究において、NECの高い発現率とIVIGとの関連性が認められた。
92	フマル酸ケチアピン リスペリドン 塩酸ペロスピロン水和物 プロナンセリン	パーキンソン病患者における骨折率に対する非定型抗精神病薬の影響を調べるため、骨折したパーキンソン病患者5071例でコホート内症例対照研究を行った結果、ケチアピン、リスペリドン、オランザピンの投与により骨折のリスクが上昇した。
93	リスペリドン	精神症状を持つ青少年における肥満、空腹時高血糖(IFG)及び2型糖尿病と第二世代抗精神病薬(SGA)との関連を調べるため、精神科緊急入院患者で後向きカルテ審査を行った結果、SGA治療群はSGAナイブ群と比べBMI、肥満、過体重、IFG、2型糖尿病、総コレステロール、HDL、LDLに異常のある割合が高かった。
94	リスペリドン(他1報)	リスペリドン、オランザピンとメタボリックシンドロームの関連を調べるため、3ヶ月間投薬を受けた統合失調症の女性94例を調査したところ、新たに11例がメタボリックシンドロームと診断された。また両群とも腹囲が増加し、オランザピン投与群ではLDL、リスペリドン投与群ではTGが上昇した。
95	リスペリドン(他2報) ハロペリドール	抗精神病薬と脳血管イベントのリスクの時間的関連を調べるため、50歳以上の抗精神病薬を投与された26157例でコホート研究及び症例対照解析を行った。現在使用中、7-30日前に服用した患者及び処方7日以内の患者では脳血管イベントのリスクが上昇し、31日以上前に使用した患者及び3ヶ月以上継続した患者ではリスクが減少した。
96	センノシド含有一般用医薬品	約10年間センナを服用していた31歳の女性に、るい瘦、周期性浮腫、消化不良、筋肉栄養不良、全身反射低下、肝障害、筋障害マーカー上昇、高脂血症、筋電図異常、ミトコンドリアミオパシーが認められた。
97	リン酸コデイン	カナダにおいて授乳婦に対するコデイン使用のガイドラインが作成された。 1.新生児の哺乳力が弱い等の場合、受診すべきである。 2.CNS抑制は4日目以降に悪化することが多いため、4日以上使用しない。 3.遺伝子検査を実施してCYP2D6の遺伝子型を調べること。 4.9つの試験で、コデインの鎮痛作用はNSAIDsと比べ優位性を示さなかった。 また、中枢神経(CNS)抑制は母子ともに認められる事象である。
98	バルプロ酸ナトリウム	児の流暢性及び柔軟性に及ぼす抗てんかん薬の胎性曝露の影響を調べるため、妊娠中カルバマゼピン、ラモトリギン又はバルプロ酸の投与を受けたてんかん女性の児54例で前向き研究を行った結果、バルプロ酸曝露児は他の薬剤曝露児に比べ流暢性及び柔軟性が有意に低かった。
99	カルバマゼピン	インド人においてカルバマゼピン誘発性スティーブンスジョンソン症候群(SJS)とHLA-B*1502の間に関連を検討した結果、SJSと診断された8人のうち6人がHLA-B*1502を保有していた。
100	アミノフィリン	妊娠中の経口アミノフィリンによる治療と先天性骨格異常の関連について妊娠女性を対象に解析したところ、アミノフィリンの経口投与により新生児での筋骨格系の先天異常の発現リスクが上昇する可能性が示唆された。
101	エプタコグ アルファ(活性型)(遺伝子組換え)	遺伝子組換え活性型血液凝固第VII因子製剤(rFVIIa)の外傷患者への使用に関するレトロスペクティブケースコントロール研究において、対象群に比べrFVIIa投与群において死亡率の増加が認められた。

102	シプロフロキサシン 塩酸シプロフロキサシン	12例の健常人を対象に行われたシプロフロキサシンとプロベネシドとの相互作用に関するランダム化交叉試験において、プロベネシドがシプロフロキサシンおよびその代謝物の腎尿細管分泌を競合的に阻害することが示唆された。
103	リファンピシン	エバスタチンの薬物動態及び薬力学におけるリファンピシンの影響を調べるため、10人の健常人にリファンピシンを10日間前投与し、エバスタチン経口投与後12時間までの抗ヒスタミン効果及び24時間、72時間後の血液、尿サンプルを採取し測定したところ、前投与しない群と比較して、リファンピシン前投与群はエバスタチンのバイオアベイラビリティの減少させ、活性代謝物のカレバスタチンのAUCを15%に抑制し、抗ヒスタミン効果を抑制した。
104	リン酸オセルタミビル	ラットをコントロール(CON)群、Lipopolysaccharide (LPS) 投与群、LPS+オセルタミビル(OT)群、OT群(各群n=8)に分け、LPS群、LPS+OT群に対しLPSを腹腔内投与し、3時間後CON群、LPS群には水道水を、LPS+OT群、OT群にはOTを経口投与し、1時間後に9分間のオープンフィールド試験を行ったところ、OT群は毛繕いなどの行動傾向が強く見られたが、全体的にはCON群と近い行動を示した。
105	リン酸オセルタミビル	リン酸オセルタミビル(OP)とカルボン酸オセルタミビル(OC)の体温低下作用を知るため、それぞれの腹腔内投与(ip)、脳室内投与(icv)の影響を調べたところ、ip投与においてはOPが体温低下作用を示したのに対し、OCは低下しなかった。icv投与においてはOPは用量依存的に体温が低下したのに対し、OCはOPと比較して作用は弱く、用量依存性は明確ではなかった。
106	シスプラチン	シスプラチンを含む化学療法を受けた患者936例について後ろ向きに調査を行ったところ、シスプラチン最終投与後4週間までの間に171例で血栓塞栓事象が発現した。発現率は、癌種、疾患の程度や併用した抗がん剤の種類によってばらつきがあった。
107	マレイン酸フルボキサミン(他1報)	心臓病患者の予後と抗うつ薬のクラス差を調べるため、心不全で入院した99335例で全死亡、心血管性の死亡のリスクを調査した結果、β-ブロッカーは心血管性の死亡リスクを減少させ、三環系抗うつ薬及びSSRIは全死亡及び心血管性の死亡のリスクを上昇させた。β-ブロッカーとの併用においてSSRIは三環系抗うつ薬と比べ全死亡及び心血管性の死亡のリスクが高かった。
108	マレイン酸フルボキサミン 塩酸セルトラリン	選択的セロトニン再取り込み阻害薬(SSRI)及び3環系抗うつ薬(TCA)による股関節部骨折のリスクについて、66歳以上の股関節骨折症例8329例を対象に症例対照研究を行った。その結果、いずれの抗うつ薬に暴露しても骨折リスクは有意に増加した。
109	マレイン酸フルボキサミン	三環系抗うつ薬及びSSRIは股関節骨折のリスクについて、16341例の股関節骨折症例、29889例のコントロールを用い症例対照解析及び自己対照症例シリーズ解析を行った結果、両解析とも両薬剤群で股関節骨折のリスクは上昇し、治療開始15日内で最も高かった。また、症例対照解析の方が両薬剤群ともオッズ比は高くバイアスが示唆された。
110	マレイン酸フルボキサミン 塩酸セルトラリン	65歳以上の高齢女性8172例を対象に中枢神経用薬と骨折の関連性について検討した結果、抗うつ剤を使用している高齢女性の股関節部骨折リスクは未使用者に比べると1.7倍であった。
111	マレイン酸フルボキサミン	転倒リスクと薬物との関連を調べるため、股関節骨折で入院した退役軍人2212例と急性心筋梗塞及び肺炎で入院した対照群を比較し転倒に関連する外来処方薬の使用を分析した。対照群と比べ股関節骨折群は抗痙攣剤/バルビツール酸、抗うつ薬、抗パーキンソン病薬、抗精神病薬及びコリンエステラーゼ阻害薬の使用、中枢神経系薬及び心循環系薬との併用で差が見られた。
112	マレイン酸フルボキサミン	抗不安薬、鎮静薬、神経遮断薬及び抗うつ薬と骨折リスクとの関連を調べるため、骨折を生じた124655例及びコントロール373962例で症例対照研究を行った結果、抗不安薬と鎮静薬、神経遮断薬は0.1DDD/day、0.05DDD/dayより少ない量で骨折リスクがわずかに上昇し、用量依存性は見られなかった。抗不安薬のリスクは用量依存性が見られ、三環系と比べSSRIの方がリスクが高かった。
113	マレイン酸フルボキサミン 塩酸セルトラリン	50歳以上の骨粗鬆症性骨折症例15792例を対象に、向精神薬が骨折リスクに与える影響及び用量効果の関係の有無を調査した。その結果、選択的セロトニン再取り込み阻害薬(SSRI)は他の向精神薬よりもリスクが高く、SSRI以外のモノアミン再取り込み阻害薬及びベンゾジアゼピン系薬剤とも関連が認められた。またSSRI及びベンゾジアゼピン系薬剤で用量効果関係が認められた。
114	マレイン酸フルボキサミン	股関節骨折又はその他の骨折の罹患率、発生率及びリスクファクターについて、人工透析患者12782例を用いて調べた結果、SSRI及び麻薬の併用で股関節骨折のリスクは上昇した。麻薬性鎮痛薬、ベンゾジアゼピン、ステロイド、麻薬の併用及び高PTHで全般的骨折のリスクは上昇し、リスクファクターは高齢、女性、腎移植の既往及び低アルブミンであった。

115	マレイン酸フルボキサミン	保険請求データベース研究におけるSSRIと股関節骨折との関連性について、65歳以上の患者7126例を調査した。BMI、喫煙、認知機能、日常生活活動性スコア及びRosow-Breslau障害スケールでバイアスがかかっていたが、これらのバイアスを修正後の相対リスクは最近の保険請求データベース研究に匹敵するものであった。
116	カプトプリル	無作為化第三相臨床試験より血管浮腫の発現を解析したところ、ACE阻害剤+ビルダクリプチン投与例2754例のうち14例で血管浮腫が認められた。
117	クエン酸クロミフェン	不妊治療薬の使用と子宮癌の発現の関連を調べるため、1963年から1998年に不妊のためデンマークのクリニックを受診した女性54362例を対象に、ケースコホート法を実施した結果、ゴナドトロピンの使用は子宮癌のリスクを2倍以上に増大させた。また、クロミフェンまたは絨毛性性腺刺激ホルモンを6周期以上曝露した患者も、子宮癌のリスクを2倍以上に増大させた。
118	クエン酸クロミフェン	スウェーデンにおいて不妊症治療を受けた1135例の女性を対象に、不妊の原因と不妊治療の乳癌発生リスクへの影響を検討した前向きコホート研究において、高用量クエン酸クロミフェンの使用群では乳がん発生リスクが約2倍高いことが示された。
119	塩酸セルトラリン	高齢者における抗うつ薬と非脊椎骨折リスクとの関連を調べるため、55歳以上の高齢者7983例を用い集団コホート研究を行った結果、SSRIを服用中の高齢者は非使用者に比べ非脊椎骨折のリスクは2.35倍、過去に三環系抗うつ薬又はSSRI服用経験のある高齢者に比べ2.07倍上昇した。
120	塩酸セルトラリン	SSRIを服用する患者の精子DNA及び精液機能を評価するため、SSRIを服用するうつ病男性74例及び健康男性44例を調査した。コントロール群と比べSSRI群の総精子数及び精子の運動性は有意に低く、射精時の正常精子数及び精子核内における変成一本鎖DNAの割合は有意に高かった。
121	アセトアミノフェン	345例の女性を対象に妊娠中アセトアミノフェン使用と子の生後1年間の呼吸器症状について調査した結果、妊娠中期から後期におけるアセトアミノフェン使用と子の喘鳴とに有意な関連性が認められた。
122	アセトアミノフェン	妊娠中のアセトアミノフェン暴露があり、子供が18ヶ月の時点で調査を受けた66445例の女性と子供が7歳に達した12733例の女性を対象とし、出生前のアセトアミノフェン暴露と幼児期における喘鳴・喘息リスクとの関連性についてコホート研究を行ったところ、出生前アセトアミノフェン暴露と喘息・喘鳴リスクの増加とに関連性が認められた。
123	アセトアミノフェン	712例の幼児の出生前の薬剤使用状況等を調査した結果、妊娠後期のアセトアミノフェン使用と5歳時における喘鳴発現リスクの上昇に関連性が認められた。
124	アセトアミノフェン	3-5歳の1741例を対象に妊娠中のアセトアミノフェン使用と子供の喘鳴症状、母親の喘息罹患の有無等について調査した結果、妊娠中のアセトアミノフェン使用頻度と幼児期の喘鳴有病率との関連性が認められ、母親の喘息の罹患の関与も示唆された。
125	ヒトインスリン(遺伝子組換え)	2型糖尿病合併の急性心筋梗塞後の血糖降下剤が1年間不変であった患者865例についてインスリン誘発性体重増加と心血管系死亡率・罹患率の関連を調べた結果、インスリン誘発性体重増加と死亡率に関連は見られなかったが、新たにインスリンを開始した群では経口糖尿病薬群や薬剤未使用群に比べ、急性心筋梗塞の再発率が高かった。また、調査以前よりインスリンを継続投与した群では、他の治療群に比べ心血管系疾患死亡率が高かった。
126	リツキシマブ(遺伝子組換え)	リツキシマブ投与患者77例について、感染症の発現率を調査した結果、35例で感染症が発現した。また、77例中9例が死亡したが、うち7例の死亡に感染が関連していた。
127	プラバスタチンナトリウム	細胞を用いてスタチンの筋毒性について検討したところ、スタチンによりリアノジン感受性部位およびミトコンドリアからカルシウムを遊離し、筋毒性を引き起こすことが示唆された。

128	プロポフォール(他1報)	腎不全の患者8名を対象にプロポフォール及びalfentanilによる鎮静の呼吸応答を検討した結果、酸素不飽和状態は対照群より腎不全群でより顕著であった。また無呼吸及び低呼吸も対照群より腎不全群でより頻繁に発生した。
129	エストロゲン[結合型]	WHIランダム化臨床試験において、閉経期のホルモン療法(HT)と肺がんの関連を調べた結果、閉経後女性において、5年を超える結合型エストロゲン+酢酸メドロキシプロゲステロンの使用群では、プラセボ群に比較して女性の非小細胞肺癌死亡率が高かった。
130	肺炎球菌ワクチン	23価肺炎球菌ワクチンを接種した551例を対象に接種後5年間の観察研究を行った結果、初回接種群に比べ、再接種群における注射部位の重度の疼痛、紅斑および硬結の発現リスクに優位な増加が認められた。
131	オメプラゾール	ピロリ菌感染スナネズミに対しオメプラゾール100mg/kg/dayを6ヶ月間投与した際の胃粘膜の変化を検討した結果、腺癌の発生を6割の個体に認めたことから、プロトンポンプ阻害剤の長期投与により腺癌の発生を促進する可能性があることが示唆された。
132	酢酸メドロキシプロゲステロン	デポ型酢酸メドロキシプロゲステロン避妊薬長期使用患者において、腰椎あるいは大腿骨の5%以上の骨密度低下発現の予測因子を調べた結果、5%以上の骨密度の低下は、現在の喫煙やカルシウムの摂取、出産経歴と関連があった。
133	塩酸イミプラミン	軽度から重度までのうつ病患者においてプラセボに対する抗うつ薬(パロキセチン及びイミプラミン)の有用性を文献調査した結果、採択された6試験(各成分3試験)においてプラセボに対する薬剤の優位性はうつ病の重症度が増すほど大きくなり、軽症から中等症の患者では有用性は認められなかった。
134	オメプラゾール(他1報)	クロピドグレル単独又はプロトンポンプ阻害剤(PPI)を併用した患者10,703例を対象として、一年間の死亡又は心筋梗塞のリスクをプロスペクティブに検討したところ、クロピドグレル単独投与群に比べPPI併用群において死亡又は心筋梗塞のリスクの上昇がみられた。
135	オメプラゾール(他3報) ランソプラゾール	クロピドグレル服用中の経皮冠動脈形成術施行患者1192例を対象に心血管イベントに対するプロトンポンプ阻害剤(PPI)の影響を検討した結果、PPI非併用群と比べPPI併用群では死亡及び心血管イベントが有意に多かった。また、退院時のPPIの服用が心血管イベント発生に関する独立予測因子であることが示唆された。
136	オメプラゾール(他1報)	クロピドグレル服用中の経皮冠動脈形成術施行患者8311例を対象に、死亡率、ステント血栓症及び標的病巣血管再開通術の転帰を調査した結果、プロトンポンプ阻害剤(PPI)服用群ではPPI非服用群に比べ死亡率が高く、ステント血栓症及び標的病巣血管再開通術の転帰に関してはPPI服用群でリスクの上昇は見られなかった。
137	オメプラゾール	クロピドグレルとアスピリンの抗血小板作用に対する影響について冠動脈疾患患者21例の血小板反応性を検討したところ、esomeprazoleとクロピドグレルを併用した場合にクロピドグレルの作用の減弱がみられ、クロピドグレルの反応性低下症例数が8倍増加した。
138	塩酸ラロキシフェン	デンマークのデータベースを用い、骨粗鬆症治療薬の使用と食道胃関連事象(食道炎、食道潰瘍、胃十二指腸潰瘍など)の関連についてコホート研究を行った結果、ラロキシフェン使用群ではコントロール群と比べて食道炎、食道潰瘍、食道穿孔の発現が有意に高かった。
139	ウルソデスオキシコール酸	男性804例女性388例を対象にウルソデオキシコール酸の結腸直腸腺腫に対する予防効果を分析した結果、男性では病変進行リスクが低下したが、女性ではリスク減少は認められなかった。また、女性かつ若年、肥満、脂肪高摂取のいずれかの因子を持つ場合は病変進行リスクが上昇した。
140	ハロペリドール	65歳以上の認知症患者9729例において、非定型抗精神病薬及び定型抗精神病薬による死亡リスクを比較するため後ろ向きコホート研究を行った結果、定型抗精神病薬使用群は非定型抗精神病薬使用群に比較し、死亡率が上昇した(ハザード比:1.26)。

141	エストリオール	閉経期および閉経後の女性患者36588例を対象としたプロスペクティブコホート研究において、ホルモン補充療法を受けていない患者と比較して、エストロゲン+プロゲステン併用およびその使用期間の延長により肺癌発生リスクが増加した。
142	シメチジン	クロピドグレル服用中の急性心筋梗塞患者1,751例を対象に再梗塞発現率を検討した結果、クロピドグレル(PG)+プロトンポンプ阻害剤(PPI)併用患者は、どちらか1剤を使用していた患者と比べ再梗塞リスクが高かった。さらに、PG+シメチジン併用患者ではPG+PPI併用患者と同様の再梗塞リスクが認められた。
143	塩酸セルトラリン	抗うつ薬と股関節/大腿骨骨折の関連を調査するため、6723例の骨折症例と26341例のコントロール群で症例対照研究を行い、5-ヒドロキシトリプタミントランスポーター(5-HTT)阻害の程度と服用持続期間を調べた。股関節/大腿骨骨折のリスクはSSRIと三環系抗うつ薬群の服用中の患者、及び全抗うつ薬群において5-HTT阻害の増加により上昇した。
144	リスペリドン(他1報)	第二世代抗精神病薬(SGAs)による急性中毒について第一世代抗精神病薬(FGAs)と比較するため単剤治療を受けた1975例を対象に後ろ向きコホート研究を行ったところ、SGAsによる重篤な有害転帰(呼吸抑制、昏睡、低血圧)及び死亡はFGAsと比べて有意に上昇した。
145	アスピリン	二種類の抗血小板薬(アスピリン、クロピドグレル)とプロトンポンプ阻害剤(PPI)を併用した患者では、PPIを併用しなかった患者と比較し、心筋梗塞の発現率の増加が見られた。
146	ラベプラゾールナトリウム	胃食道逆流症(GERD)の患者52例における体重及びBMIに対する長期のPPI療法の影響を、健康成人58例を対照群として約2年間観察研究を行った結果、研究終了後の体重及びBMIにおいてPPI長期服用GERD群では増加が確認されたが、対照群では変化がなかった。
147	フェノバルビタール	若年期における慢性的な抗てんかん薬の投与が海馬中の細胞増殖及び神経形成に及ぼす影響を調べるため、生後7日のラットにフェノバルビタール、クロナゼパム、カルバマゼピン、バルプロ酸又はトピラマートを28日間投与した。コントロール群と比べフェノバルビタール及びクロナゼパム投与群の細胞増殖、新生細胞の生存は有意に阻害され、神経形成は有意に減少した。
148	ベタメタゾン・d-マレイン酸クロルフェニラミン	ベタメタゾンを含む製剤の分解産物であるBetamethasone 21-Aldehydeの遺伝毒性について調べるために、細菌を用いた復帰突然変異試験を行った結果、陽性であった。また、症例データベースからは発がん性に関するシグナルは得られなかった。
149	インターフェロン ベーター1a(遺伝子組換え)	多発性硬化症患者42例を対象に、インターフェロンβによる長期治療中に現れる睡眠不足や疲労がアクティグラフィを用いて測定した睡眠効率と対応するか検討した結果、睡眠効率はインターフェロンβを使用した夜間の2/3では使用していない夜間に比べて平均5%悪化し、睡眠評価はアクティグラフィと相関した。
150	吉草酸ベタメタゾン	ベタメタゾンを含む製剤の分解産物であるBetamethasone 21-Aldehydeの遺伝毒性について調べるために、細菌を用いた復帰突然変異試験を行った結果、陽性であった。一方、症例データベースからは発がん性に関するシグナルは得られなかった。
151	メトトレキサート	腹膜転移を有する胃癌患者236例を、5-FU持続静注群とメトトレキサート、5-FU、ロイコボリン投与群に無作為化した結果、メトトレキサートを含む群で2例が死亡した。
152	ジクロフェナクナトリウム	急性心筋梗塞(MI)により入院した患者に対する非ステロイド性抗炎症薬(NSAIDs)の使用が死亡率の増加に関連するか、MIにより入院した全患者を対象に多変量Cox比例ハザードモデルにより分析したところ、NSAIDs非投与群と比較して、Rofecoxib、ジクロフェナク投与群で30日後の死亡率増加が認められ、Rofecoxib、セレコキシブ、ジクロフェナク投与群で1年後の死亡率増加が認められた。
153	シロドシン	α1A受容体拮抗薬服用による術中虹彩緊張低下症候群(IFIS)の発症リスクについて、超音波乳化吸引術を施行した1174例の患者を対象に前向き調査を行った。その結果、IFISの発症率はα1A受容体拮抗薬内服症例の25.4%であり、シロドシン内服例で重症化する傾向が見られた。

154	塩酸リドリン	切迫早産治療を目的にリドリン単独またはリドリンと硫酸マグネシウムを投与された患者群において、肝機能値、CK値の推移を比較検討した。結果、単独群と比較して併用群ではCK値が有意に上昇し、AST値も単独群 $20.7 \pm 12.5$ IU/Lに比較して併用群は $34.9 \pm 65.3$ IU/Lであり有意に高かった。
155	イソニアジド	2004年から2008年に発現した潜伏結核感染治療に関連した重度の有害事象(SAEs)を調べたところ、イソニアジドの投与を受けた患者において、重度の肝障害が17例発現した。
156	組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)	B型肝炎により肝移植を受けた患者を対象に、B型肝炎ワクチン接種後、1年以上B型肝炎の再発をモニターしたところ、B型肝炎ワクチン接種後のHBsAb値が最終フォローアップ時点で、10IU/L以上であった患者は0例だった。
157	組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)	スクリーニングNAT陽性献血者のうちHBs抗体が陽性、HBe抗体が陰性の献血者をフォローアップしたところ、2例がHBワクチン接種者であった。
158	組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)	2回の組換え沈降B型肝炎ワクチン接種後、免疫原性が得られなかった症例が2例報告された。
159	組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)	慢性B型肝炎により生体肝移植を行う患者18例及びHBsAb陽性ドナーから移植を受ける生体肝移植患者2例に対し、組換え沈降B型肝炎ワクチンを通常の4倍量を6回接種し、HBsAbの変化を調べたところ、20例全てにおいて500IU/mLを超える抗体価は得られなかった。
160	組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)	成人男性に対し組換え沈降B型肝炎ワクチンを0.5mLを筋肉内に2回から6回まで半年毎に接種した後、抗体価を定量測定したところ、全体で約37%が陽転化した。
161	組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)	38歳の男性に対し、A型肝炎ウイルス不活化ワクチン/B型肝炎ウイルスワクチンrHBsAg(酵母由来)を3回接種した後、組換え沈降B型肝炎ワクチン40 $\mu$ gを3回接種した後にB型肝炎ウイルスの抗体価を測定したところ、10IU/L未満であった。
162	組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)	組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)3回接種後、免疫原性が得られなかった症例が4例報告された。
163	組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)	42例に組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)を3回接種したところ、免疫原性が得られなかった症例は11例であった。
164	組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)	組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)接種後、免疫原性が得られなかった症例が1例報告された。
165	組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)	56例の患者に組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)を3回接種したところ、免疫原性が得られなかった症例は17例であった。
166	組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)	15例に組換え沈降B型肝炎ワクチン(酵母由来)を3回接種し、3回目接種同日に採血し抗体価を測定したところ、陽性化した症例が3例であった。

167	シンバスタチン(他1報)	閉経後の過体重あるいは肥満患者を対象にスタチン投与と乳癌の発生リスクに関するケースコントロール研究において、疎水性スタチン投与群は非投与群に比べ、プロゲステロン受容体陰性乳癌の発生リスクが有意に高かった。
168	シスプラチン	胸部悪性腫瘍患者をシスプラチン先発品使用群296例、後発品使用群321例に分けて、腎障害の発現についてレトロスペクティブに調査を行った結果、後発品使用群で腎障害が多く認められた。
169	エポエチンα(遺伝子組換え) ダルベポエチン アルファ(遺伝子組換え)	赤血球造血刺激因子(ESA)及び鉄剤による貧血管理の違いの死亡リスクに影響を検討したところ、ヘマトクリット値30%以下の患者に対し大量のESAを使用した施設では少量のESAを使用した施設と比べて死亡率が低く、ヘマトクリット値33%以上の患者においては、ESAの積極的使用が死亡率上昇と関連していた。
170	オメプラゾール(他1報)	クロピドグレルの抗血小板作用に及ぼすオメプラゾールの影響について健常者20例にて検討した結果、オメプラゾール投与被験者のPRUはオメプラゾール非投与被験者のPRUよりも有意に高かった。また、血小板作用の阻害率はオメプラゾール投与後に低下した。
171	フロセミド	包括的医療プログラムの処方記録がある2つのコホートを対照にコホート内症例対照解析を行った結果、フロセミドは乳癌リスクを増加させる可能性が示唆された。
172	ポリコナゾール	ポリコナゾールの長期間投与を受けた患者4例において、3例で皮膚癌の出現前に重度の光線過敏反応を呈した。
173	オキサリプラチン	切除不能の転移性結腸直腸癌患者で第一選択薬としてFOLFOX-4を投与された217例について調査した結果、Val105対立遺伝子を持つ患者でグレード3~4の末梢神経障害のリスクが高い傾向が示唆された。
174	ニトラゼパム	自殺未遂の妊婦のもとに生まれた小児における大量ニトラゼパムの催奇形性作用を評価するために、妊娠中暴露した子どもと暴露していない子どもを比較した結果、先天異常は暴露群で30%(13例/43例)、非暴露群で10%(3例/29例)認められた(オッズ比3.8(CI 1.0-14.6))。暴露した小児の先天異常のほとんどは軽度であり、奇形型であった。
175	オメプラゾール	冠動脈ステント留置後にクロピドグレルを投与された日本人患者700例をプロトンポンプ阻害薬(PPI)併用群及びPPI非併用群の2群に分類し、心血管死、心筋梗塞、冠動脈血管再開通術の発現について評価をしたところ、PPI併用群で評価項目未発現症例の生存率が有意に低く、評価項目の相対リスクは有意に高かった。
176	オメプラゾール	クロピドグレル投与患者9例を対象に無作為化クロスオーバー試験を行い、クロピドグレルの抗血小板作用に及ぼすオメプラゾールとラベプラゾールの影響について検討した結果、ラベプラゾールはクロピドグレルの抗血小板作用に有意な影響はみられなかったが、オメプラゾールでは有意な低下がみられた。
177	ロスバスタチンカルシウム	1994-2009年に登録された13の無作為化比較試験のメタ解析において、スタチン系薬剤使用と糖尿病発現リスクの上昇との有意な関連性が認められた。
178	メトトレキサート	リンパ節転移陽性原発性乳癌患者2887例に対して、ドキシソルビシン・メトトレキサート・ドセタキセルを含む化学療法を行った結果、3例が死亡した。
179	レボホリナートカルシウム	転移性結腸直腸癌40例に対してセカンドラインとしてベバシズマブとイリノテカンによる化学療法を行った結果、出血により1例が死亡した。

180	ベバシズマブ(遺伝子組換え)	2009年5月までのPUBMED,Web of Science,American Society of Clinical Oncology conferencesを検索し、ベバシズマブと他の抗がん剤との無作為化対照臨床試験からデータを抽出した結果、試験20件の各種腫瘍患者12,656例において、ベバシズマブ群でグレードの高い高血圧がリスクが上昇した。
181	塩酸バンコマイシン	バンコマイシン低感受性の疑いがあるStaphylococcus aureusの感受性検査を行ったところ、最小発育阻止濃度は4 $\mu$ g/mLであった。
182	クエン酸タモキシフェン	クエン酸タモキシフェンおよび選択的セロトニン再取り込み阻害剤(SSRI)を投与された2430例についてコホート研究を行った結果、平均フォローアップ期間2.38年の間に374例が乳癌により死亡した。
183	塩酸ポリヘキサニド(他1報)	ソフトコンタクトレンズ用消毒剤を注ぎ足して使用するとアcantアメーバが死滅せず残存する可能性が示唆された。また、石鹼での手洗い、レンズのこすり洗い、レンズケースの定期的な交換の3点の注意点を守ってレンズケアを行っていた学生は、守っていなかった学生と比べて、アcantアメーバ汚染率・細菌検出率ともに低かった。